

学習院戸山キャンパスに遺る 4B館とC館に関する建築史的研究

ウーゴ ミズコ・杉山 経子・佐藤 桂¹

1. はじめに

学習院戸山キャンパスについては、これまでに学習院内外で発掘調査を含む研究が行われ、江戸時代から平成時代までの敷地の遷り変りの概要が明らかにされている。その中には、近衛騎兵聯隊時代に建設され、校舎として利活用されてきた女子大学4号館・女子中等科 高等科B館（以降4B館と略記、旧兵舎）とC館（旧炊事場・風呂場）の情報も含まれる²。しかしながら、キャンパスの変遷に主眼を置く多くの文献がそうであるように、建物の詳細については不明な点が残されている。したがって本稿では、2009（平成21）年と2021（令和3）年の間に行われた一連の建造物調査の成果を踏まえ³、これまでに明らかにされてこなかった建物の特徴に迫り、最終的には建物が有する文化的社会的価値を浮き彫りにすることをめざす。論の構成は四章から成る。第一章では、学習院で編纂された資料を中心に戸山キャンパスの変遷を追う中で、これまでさほど重き置かれてこなかった学習院女子短大の設立以降の移り変わりに着目する。第二章と第三章では、建造物調査の中で明らかになった4B館とC館の建築細部に焦点を当て、兵営建築史の中における各建物の位置付けを明らかにする。そして、第四章では、特に4B館を取り上げ、その歴史的社会的価値を展望してみたい。

1-1. 戸山キャンパスの変遷—女子短大・大学地区を中心に—

元尾張徳川家の下屋敷であった敷地は、1871（明治4）年に御親兵（明治5年より近衛兵に改称）の駐屯地となり、さらに1873（明治6）年より陸軍兵学寮戸山出張所が置かれた。その後、1911（明治44）年より現大手町にあった近衛騎兵聯隊が戸山への移動準備を開始し、1912（明治45）年には4B館の一部、そしてC館が竣工し、その他に聯隊本部や厩舎などが建設された⁴。

騎兵聯隊の移転が完了した1913（大正2）年以降、将校と下士官を含む200名ほどが訓練を行った⁵。しかし、時代別の地図を見比べると、近衛騎兵聯隊の移転後も必要に応じて、そして敷地の起伏に応じて建物の移転が行われたことが推察できる。例えば、聯

隊が活躍していた1931～32（昭和6～7）年頃の地図と、女子学習院移転時の戦直後の地図で、建物が新築されたことがうかがえる（図1-1、図1-2）⁶。特に、聯隊時代最後の建物の配置を残していると思われる後者には、敷地の南東に流れている音無川のさらに南東にあった兵器庫、（製靴）工場と被服庫の3棟が昭和初期になって北側の炊事場と弾薬庫の間に新築されたことが分かる。また、兵営敷地の変わらない特徴も分かる。敷地は、かつて正門があった現在早稲田大学が位置する東方面から、裏門が置かれた西側の環状4号線（現明治通り）まで東西方向に細長い形状である。さらに、東南側に段差があったこともあり、建物は敷地北境界線に沿って東西方向に並んで建てられたと考えられる。また、資料や古写真を通じて、正門から西方向に北側に並ぶ建物（弾薬庫、火薬庫、被服庫、製靴工場、兵器庫、炊事場・風呂場、兵舎）は煉瓦造であり、南側に並ぶ建物（将校集会所、医務室、聯隊本部、酒保、厩舎、軍馬補充部、獣医室）は木造であったことも推測される⁷。



図1-1 1931～32（昭和6～7）年頃の近衛騎兵連隊
近衛写真集編纂委員会（編）『近衛騎兵連隊写真集』1991年より

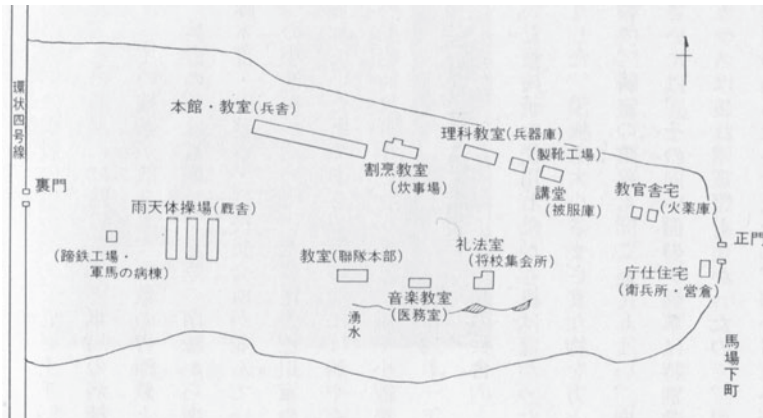


図1-2 移転当時の戸山校地略図
『学習院百年史』、第二編、1980年、572ページより

以上の兵営時代の建物の配置は、学習院女子大学が開校する1998（平成10）年以降も戸山キャンパス全体のデザインの基礎になったと言える。それは、開発の軸と建物の配置が現在でも東西に延びていることと、中庭が当初建物の建っていない場所に作られたことから明らかである。その意味では、現存する煉瓦造の建物二棟が、後の時代に建てられる校舎の煉瓦風外観の基調となっている点も見逃せない。

戦後、多くの学校施設が震災等で建物を失い、旧陸軍施設を校舎に転用することになったが⁸、学習院もその例に挙げられる。

1946（昭和21）年より女子学習院（現学習院女子中等科 高等科、以降女子部と略記）が近衛騎兵聯隊跡に移転したが、後に敷地の一部は他校へと渡り、敷地規模は縮小された⁹。さらに、学習院初等科や男子中等科も戸山キャンパス内の兵営建築を利用したものの、短期間で他の敷地へ移転した¹⁰。このように残存していた近衛騎兵聯隊時代の複数の建物が再利用されたが、1950（昭和25）年より学習院大学短期大学部が設立され、その校舎として女子部が利用していた現4B館の一部を利用することとなった。これが現在の女子大学の出发点である。

1953（昭和28）年に短期大学部が学習院女子短期大学となり、1954（昭和29）年に4B館の北側に短期大学初の専用校舎が竣工した。権藤建築設計の設計、三井建設の施工で鉄筋コンクリート造2階建ての校舎（旧3号館）だったが、現在、跡形もない¹¹。そのため、短期大学（女子大学の前身）の発祥の地である4B館は、目に見える大学の出发点の唯一の手がかりである。その後、短期大学が拡大するにつれ、戸山キャンパスの西側が徐々に短大地区として調和のとれたデザインで整えられていった。設立から二十年ほどたった1970年代以降に、次の開発期を迎えることになるが、キャンパス全体とその建物の増改築はまさに教育組織の変遷を映し出している。

1975（昭和50）年に体育館（設計施工は鹿島建設）が竣工すると同時に、短大地区の再開発計画も準備された。それは、中央広場の造成とそれに面した本部の新設、図書館の新築、そして4号館内にあった図書館が移設されることにより、研究室の4B館への移転が盛り込まれた（1976年度）¹²。

1982（昭和57）年に、前川國男建築設計事務所の設計、鹿島建設の施工で新しい図書館が元聯隊本部のあった前の広場の敷地に建てられた。この建物は、兵営建築の煉瓦造建築を思わせる「打ち込みタイル」の最初の建物となる¹³。また、同事務所、同施工会社は敷地の北部に沿って1986（昭和61）年に3号館（互敬会館）と部室棟も手掛けた。どちらも、聯隊時代の東西方向に延びる形で建てられた。1994（平成7）年、中央広場の南側に7号館が竣工したが、それにより4B館の西端の約四分の一が切断された。これが短大時代最後の工事となるが、既にその頃から2号館の建て替えの計画が持ち上がり、1998（平成10）年に女子大学の開校に向けて工事が行われるようになる¹⁴。

2号館の建設で長年にわたり緑地化していたキャンパス最西端の敷地に、2020（令和2）年に前川建築事務所の設計と戸田建設の施工によって新1号館が竣工した。この新1号館は、かつての煉瓦造建築を連想させ、また明治時代以降に建てられた建物群とも調和するデザインとなっている。言い換えれば、百年以上たってもキャンパス全体のデザインの基調となるのが兵営建築であることが分かる。

1-2. 校舎としての4B館の変遷について

1946（昭和21）年に女子学習院が近衛騎兵聯隊跡に移転し、教室となった4B館（旧兵舎）で授業が開始された（図1-3）。その内部は部屋が仕切られていたものの、廊下側に壁がなかったため（以下、第二章を参照）、教室として利用することを目的に1947（昭和22）年に改修工事が行われた。この工事は、1923（大正12）年の関東大震災以来二度目の大改修工事と思われる。以降の改装工事については、乾尚彦氏の調べに沿って4B館に関する部分のみを取り上げる¹⁵。1955（昭和30）年の改修工事では、いくつかの広い教室が設けられ、1956（昭和31）年にガストーブが導入された。この頃、写真でも確認できるように、兵営時代のストーブの煙突も撤去されたと推測できる。また、1973（昭和48）年には、窓枠がアルミサッシに改造され、1974（昭和49）年にはスチーム暖房が導入された。

以上のように、建物は徐々に整備されていったものの、短大の開発計画が練られ、次の大きな改装が行われた。1985（昭和60）年に新しい図書館ができることに伴い、図書館として活用されていた4号館内の空間は会議室や研究室に中塚建築設計事務所の設計で改装された（鹿島建設による施工）。そして前述の通り、7号館を建設するにあたり、1993（平成6）年に4B館の西端部分が切断されたことにより、中央入口を軸に左右対称にデザインされていた他の2つの入口の内、西側の入口が取り壊され、入口2つのみとなっ

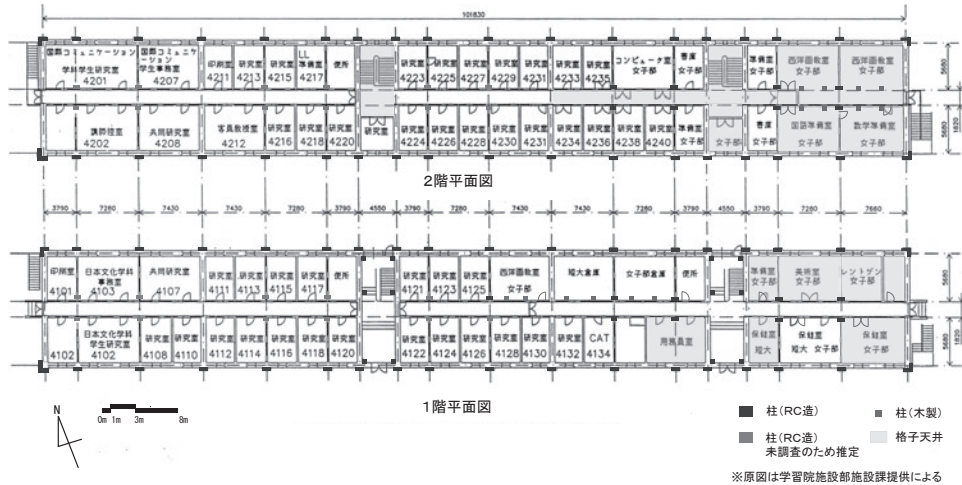


図1-3 「女子大4号館・女子部B館（4B館）現状調査図」、
杉山経子建築+デザイン研究室作成（2010年3月28日）

た。さらに、屋根は瓦葺からスレート葺へと改修されたことで、それまで兵営時代の姿を保っていた建物の当初の意匠とは印象が大きく変化したと言える。そして、1998（平成10）年に女子大学が開校するにあわせて、建物の改修も行われた。これ以降、2021（令和3）年度にはじまる耐震補強工事までに、建物に大きな変化はないと思われる。

2007（平成19）年以降、4B館にはいくつかの調査が行われたが、それらは大きく分けると、鹿島建設が行った耐震診断調査¹⁶と、歴史的建造物としての特徴を捉えることを目的とした調査に二分される。後者については、学校法人学習院企画課の依頼で杉山経子が4B館とC館を対象に2009（平成21）年から2011（平成23）年の間に行った調査があり、さらに女子大学の依頼で2019～2021（令和元～3）年に文化財保存計画協会が行った2つの調査がある。これらの調査で明らかとなった内容と兵営建築としての4B館の位置付けについて第二章と第三章で論ずる。

2. 4B館及びC館に遺る近衛騎兵聯隊施設の痕跡

第二章では現存する4B館及びC館の建設年代と2棟に遺る近衛騎兵聯隊施設を示す痕跡を、現地調査及び文献調査を基に明らかにする¹⁷。その上で近衛騎兵聯隊の兵舎及び炊事場・風呂場としての史料的价值を見出したい。

2-1. 近衛騎兵聯隊施設の移転と2棟の建設年代

近衛騎兵聯隊は、1891（明治24）年より麴町区元衛町（現千代田区大手町）の旧一橋藩邸跡地（旧軍馬局）に兵営施設を構えていたが、豊多摩郡戸塚村字下戸塚41番地（現新宿区戸山3丁目）に移転することとなる¹⁸。その要因は、当時の近衛騎兵聯隊は三菱ヶ

原（現千代田区丸の内）を演習場としていたが、中央停車場（現東京駅）の建設が決定したことで演習場の使用が不可能となったためであると推察される。その結果、新たな演習場、兵営地として、陸軍戸山学校（現新宿区戸山）の東南隅である現在の学習院周辺の土地が選定された¹⁹。

戸山への移転計画は、1911（明治44）年5月22日より進められた。「陸軍省大日記」²⁰によるとこの日付で陸軍省経理局経理課より「近衛騎兵聯隊移転改築工事の件」という通達が近衛師団経理部あてに提出されている（図2-1）。さらにそこには「・・但し兵舎本部及庖厨（厨房）浴室其ノ他建物ノ配置及敷地境界ヲ別紙図面シ通改ムヘシ（以下略、括弧内筆者）」と記されていることから、新たな施設として兵舎、本部、厨房、浴室の建設が予定されていたことがわかる²¹。

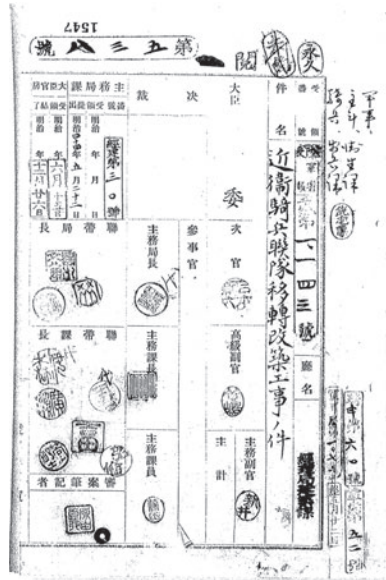


図2-1 「近衛騎兵聯隊移転改築工事の件」
「陸軍省大日記乙編 M44-5-13」

新兵営地の建物がほぼ完成した1912（明治45）年4月に戸山への移転作業が13～15日にかけて開始された。しかし移転2日目（14日）に陸軍戸山学校内の仮厩舎で火災が発生したため、移転は延期されることとなる。明治45（1912）年4月16日（火曜日）付の「讀賣新聞」朝刊には、「近衛騎兵聯隊の新兵舎、△移轉は無期延期、△焼失後の大混雑」と題した記事が掲載されている。記事には、「工事の半分が出来上がり、近衛騎兵聯隊では15日に旧施設からの移転が計画されていたがその前日に火事が発生したこと、煉瓦造2階建ての兵舎の半分が完成していること、煉瓦造平屋建ての炊事場が完成していること、兵舎の残り半分を含めた全施設が翌年3月に竣工の予定であること」が記されている。

延期されていた近衛騎兵聯隊の移転は、火事の発生から約3ヶ月後の7月5日に、第三中隊のみを残して実施された。『近衛師団沿革概要』には「明治45年7月5日 近衛騎兵聯隊（第三中隊欠）ヲ府下戸塚戸山新兵營ニ移ス」との記述が残されている²²。第三中隊が元衛町の兵営にとどまった理由は、7月には兵舎の半分はまだ建設中であり、すべての部隊の移転は不可能であったからだと考えられる。

その後1913（大正2）年3月10日には第三中隊の移転が行なわれ、兵営施設がすべて完成したことがわかる²³。近衛師団経理部『建造物履歴表 昭和11年3月31日調』には近衛騎兵聯隊施設の建造物履歴表が掲載されているが、兵舎の履歴には「明治四十五年三月

新築、(略)大正二年三月半部移築合併、(以下略)」と記述されている²⁴。

以上から4B館(旧兵舎)は1913(大正2)年、C館(旧炊事場・風呂場)は1912(明治45)年に竣工したことが判明した。

2-2. 兵舎(4B館)に行なわれた鉄筋コンクリートによる耐震補強工事

次に4B館及びC館に遺る近衛騎兵聯隊施設を示す痕跡について解明したい。はじめに兵舎であった4B館の痕跡に着目するが、最大の特徴として煉瓦造2階建ての4B館には、1923(大正12)年に発生した関東大震災の被害を受けて、1929(昭和4)年に鉄筋コンクリートによる耐震補強工事が加えられていたことが挙げられる。

1920(大正9)年の写真帖²⁵に見られる兵舎は、瓦葺の寄棟屋根に欄間付の上げ下げ窓を持つ2階建ての建物で、煉瓦積の外壁には軒と1、2階の境に蛇腹が巡っているのみである(写真2-1)。また4B館北側の出入口上部は、煉瓦1枚半の扇型アーチとして頂部には要石が現存しており、これらは当初からの痕跡であると思われる(写真2-2)。

一方で現在の4B館南側にある2ヶ所の出入口には、人造石塗洗出し仕上げの円柱や軒の柱間にはデンティル(菌型装飾)などの壁面装飾が施されている(写真2-3)。また外壁には、人造石塗洗出し仕上げの付柱や臥梁が一定の間隔で位置している(写真2-4)。いずれも1920(大正9)年頃の兵舎には見られないものであり、後補であることがわかる。

「陸軍省大日記」には、1929(昭和4)年6月6日付「近衛騎兵聯隊兵舎其他震災復旧工事実施の件」という公文書が残されている(図2-2)²⁶。この文書は、近衛師団経理部長が震災復旧工事の実施を達案したもので、関東大震災の被害を受け1929年に復旧工事が行なわれたことが記されている。

付柱や臥梁は、学習院施設部施設課の調査で鉄筋コンクリート造であることが判明している。さらに中央の長い廊下には付柱と並行した位置に太い柱があり、付柱から柱を繋ぐ梁が掛けられていること、階段の両側は厚い壁であることが確認できるが、この柱、梁及び階段両側の壁は同様に鉄筋コンクリート造であることが調査済である。このことから1929年に行なわれた復旧工事では、鉄筋コンクリートによる耐震補強が加えられたことが推察される。すなわち壁面装飾、付柱や臥梁は、関東大震災の被害を受けた復旧工事を示す痕跡であると考えられる。

以上から4B館は、関東大震災後に鉄筋コンクリートを用いた耐震補強工事が実施された可能性が高い事例であることが明らかとなった。現在震災による建物の被害状況や復旧工事の内容を示す史料は見い出せておらず、詳細な構造調査は行なわれていないため、震災時の耐震補強についてはさらなる調査研究が必要であり、今後の課題としたい²⁷。

一方で関東大震災後、陸軍が行なった煉瓦造建築への鉄筋コンクリートによる補強方法に関する調査研究²⁸があるが、陸軍施設の取り壊し時に実施された研究であり、建物

2-3. 兵舎（4B館）内部に遺る痕跡

4B館の内部には、近衛騎兵聯隊の兵舎としての痕跡が複数現存する。主たる痕跡は、第一に当初からの2本一組の木製の柱である。この柱は構造材であり、当初壁はなく、柱間は出入口で両側には銃架が備えられていた（写真2-5、2-6²⁹、図2-3³⁰）。



写真2-5 2本一組の木製の柱 4251室



写真2-6 銃架のある廊下
『近衛騎兵連隊写真集』より

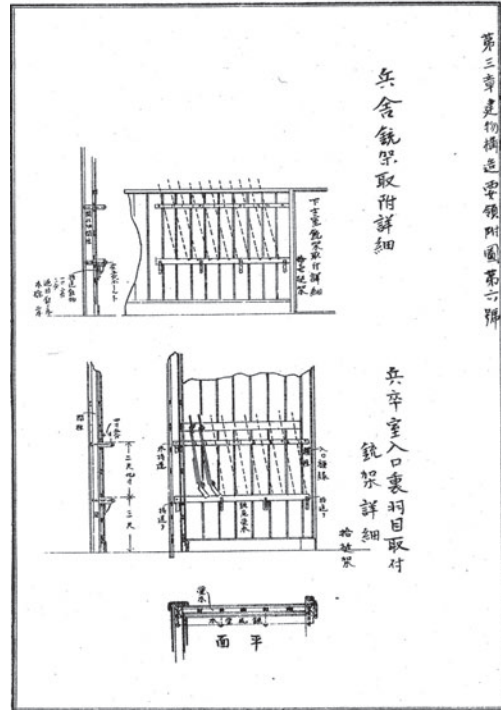


図2-3 兵舎銃架取附詳細『建築要領草案』より

第二に木製の2層の棚で、棚板は2枚合わせの山形鋼（アングル材）で下側から支持されている（写真2-7、2-8）。これは被服棚と呼ばれた兵士個人の衣服や生活用品を仕舞っておくための2段の棚（写真2-9³¹）で、棚の下には靴や手拭いを掛けるための折釘も残存している。『建築要領草案』³²によれば、兵士1人当たりの使用できる被服棚の幅は二尺八寸五分（約86cm）、下士官以上のクラスになると五尺（約151cm）で、折釘の位置なども細かく定められていた（図2-4）。また歩兵隊の兵舎の棚は1層であったのに対し、騎兵聯隊のような特科各隊の兵舎の棚は2層で作られることなども決められていた。現存する被服棚は騎兵聯隊用の2層で、幅は二尺八寸五分（約86cm）と兵室の寸法であり、『建築要領草案』通りのものが設けられていることが確認できた。

第三に欄間付きの片開き扉及び両開き扉といった木製の建具が現存している（写真2-10）。また両開き扉に嵌め込まれた4枚の擦りガラスは、当初からのものである可能性が高い（写真2-11）。さらに上部の欄間窓には5枚の板ガラスが嵌めこまれているが、そ



写真2-7 2層の被服棚



4131室 写真2-8 棚を支える山形鋼

4131室



写真2-9 2層の被服棚
『近衛騎兵連隊写真集』より

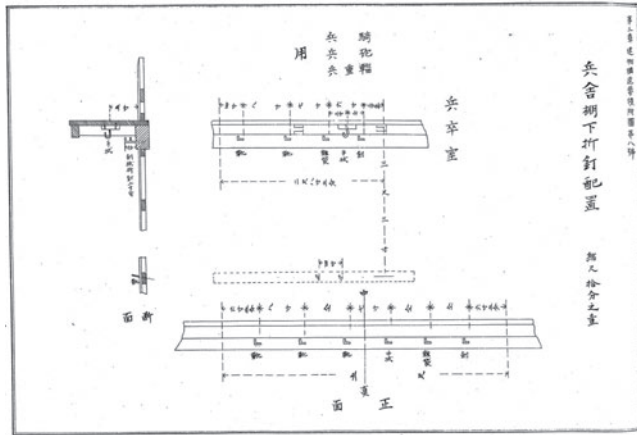


図2-4 兵舎棚下折釘配置 『建築要領草案』より



写真2-10 両開き扉 4143室



写真2-11 両開き扉のガラス(欄間左端が「銀線」) 4143室

のうち4枚はガラス面の歪みや気泡の入り方などから、当初からの透明板ガラスであると考えられる。

一方で残り1枚の左端に位置するガラスは、「銀線」と呼ばれるガラスで、騎兵兵舎から学校校舎に改修された時に交換された補修用のガラスである。「銀線」は、1948（昭和23）年3月から翌1949（昭和24）年11月までのごく短い時期に生産された、学校補修専用ガラスである³³。このように「銀線」は、終戦直後の教育施設建設・設備の歴史を示す要素のひとつであり、近衛騎兵聯隊の兵舎から学校校舎への施設変遷を物語る貴重な物証である。現存する事例は全国的にも少なく、希少な価値を有している。

もうひとつ関東大震災後の防災対策として設置された、防火シャッターが遺されている。西側の階段室と廊下の境には、鋼製の防火シャッターが1、2階とも各1ヶ所に設けられている（写真2-12）。ハンドルボックスには「KENCHIKU KANAMONOSHOKAI 特許 鈴木式 シャタア 建築金物商會製 東京 巢鴨」と表記されていることが確認できた（写真2-13）³⁴。鈴木式の防火シャッターは、调速機構の付いた自動降下式のスチールシャッターである（図2-5）³⁵。関東大震災後に国内に広く普及されたもので、おそらくこの時期に設置されたことが推察される。1931（昭和6）年に発行された建築総合カタログである『建築土木資料総覧』の「建築金物商會」の項には、「最近の主なるご用命先」として「近衛歩騎各聯隊」の記載があることから、震災後の防災対策として設置されたことがわかる。



写真2-12 西階段と2階廊下



写真2-13
防火シャッターの
ハンドルボックス

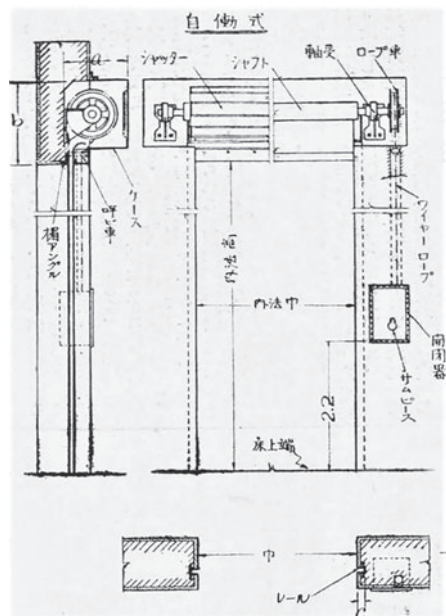


図2-5 自動式シャッター
『建築土木資料総覧』より

以上のように4B館の内部には、近衛騎兵聯隊兵舎の特徴を示す2本一組の木製の柱、被服棚、建具、関東大震災後に防災対策として設置された防火シャッター、さらに女子学習院の学校施設に移行した際に用いられたガラス「銀線」などが確認された。これらは、それぞれの歴史を示す貴重な痕跡であることが明らかとなった。

2-4. 炊事場・風呂場（C館）に遺る空気抜きの小屋根の痕跡

次に炊事場・風呂場（C館）の痕跡について考察したい（写真2-14³⁶、2-15³⁷）。煉瓦造平屋建てのC館には、炊事場及び風呂場が位置した部屋の屋根に空気抜き（煙抜き）の小屋根が設けられた痕跡が見い出せた。

C館の小屋組（屋根を支える屋根裏の骨組み）は、①キングポストトラス（洋風の小屋組・写真2-16）、②屋根の中央に建つ真束を中心に3方が垂直材で組まれた形式（写真2-17）の2種類に大別された。キングポストトラスの小屋組は小部屋や炊事場、風呂場だった部屋の端にあり、もうひとつの小屋組は炊事場、風呂場の中央に位置していた。おそらく後者の小屋組は、空気抜きの小屋根が架けられた場所に設けられたもので、真束は小屋根の最上部である棟木を支えていたことが推察される。その後小屋根は取り外され、



写真2-14 炊事場 『近衛騎兵連隊写真集』より



写真2-15 風呂場 『槍乃誉』より



写真2-16 C館小屋組①



写真2-17 C館小屋組②

屋根は塞がれている。小屋根の位置にある垂木³⁸は、棟木から90cmあまりの長さで架けられた短いものであることから、小屋根を塞いだ際に新たに架けられた垂木であることがわかる。

調理を行なう炊事場、湯気が発生する風呂場にはいずれも換気が必要であり、空気抜き（煙抜き）の小屋根が設けられたことが推察される。屋根の小屋組の痕跡は、C館が炊事場・風呂場であったことを示す特徴であるといえよう。なお1917（大正6）年頃の写真の建物には空気抜きの小屋根が見られるが（写真2-18³⁹）、1952（昭和27）年頃の写真には小屋根がないことから、女子学習院の所有となった直後に改修されたことが明らかとなった（写真2-19⁴⁰）。

2-5. 炊事場・風呂場（C館）の小庇及び引き戸の痕跡

C館には、近衛騎兵聯隊時代からだと思われる小庇や引き戸が残存していた。これらは、2010、2011（平成23、24）年に行なわれたC館の改修工事の際に、筆者の調査結果を基に修復を加え復元されている（写真2-20⁴¹）。

出入口の上部に設けられた小庇は、杉材の腕木で支えられた片流れの庇で、北西隅の出入口などの3ヶ所に残存していた（写真2-21）。前述した1952（昭和27）年頃の女子学



写真2-18 1917（大正6）年頃の炊事場・風呂場

『御臨幸記念写真帖』より



写真2-19 1952（昭和27）年頃のC館 『学習院女子中等科・女子高等科125年史』より



写真2-20 C館外観 2011年

習院の写真には、出入口に皆小庇が設けられていることから、改修工事では、出入口に小庇を設置することとなった。その結果、庇の勾配、腕木などを実測し忠実に復元された小庇が、すべての出入口に設置された⁴²。

一方で炊事場が位置した旧工芸教室には、1枚の引き戸が残存していた（写真2-22）。この引き戸は、板戸を重厚な鉄製の金具で上から吊した吊構造の扉で、風呂場の写真に見られる引き戸と同様の形式であることが判



写真2-21 残存した小庇 2010年



写真2-22 残存した引き戸 2010年

明した⁴³。改修工事では、残存した板戸部分は損傷がはげしいため別途保存し、吊金具は磨き直しを行ないそのまま活用することとした。さらに実測調査を基に新たな引き戸が作成され、当初に近い位置に設置された(写真2-23)。このようにC館の改修工事では現地調査で明らかとなった痕跡を活かし、近衛騎兵聯隊施設の歴史を継承する取り組みが行なわれたのである。



写真2-23 復元後の引き戸
2011年

2-6. 小結

以上、第二章では現地調査及び文献調査を基に、4B館、C館の建設年代と2棟に遺る近衛騎兵聯隊施設を示す痕跡の解明を試みた。その結果、2棟には数々の痕跡が現存することが確認できた。

4B館の銃架が備えられていた2本一組の柱や兵士使用の被服棚、C館の炊事場・風呂場に必要空気抜き(煙抜き)の小屋根の痕跡は、兵舎及び炊事場・風呂場としての特徴を示す遺構である。一方で4B館の両開き扉の欄間に残存したガラス「銀線」は、終戦直後の教育施設建設の歴史の一端であり、近衛騎兵聯隊施設から女子学習院の校舎への変遷を物語る貴重な遺物である。さらに4B館は、明治期の陸軍施設に関東大震災後に鉄筋コンクリートによる耐震補強工事がなされた、現存する数少ない事例であることが明らかとなった。以上から4B館及びC館は、近衛騎兵聯隊施設としての貴重な歴史史料であるといえよう。

3. 近衛騎兵營の変遷からみた4B館

第三章では、明治期における近衛騎兵營の変遷を踏まえながら、その中での4B館の位置付けについて考察する。併せて、兵舎建築に関する規定等を参照し、軍事施設に関する西洋からの技術移転にも注目したい。

3-1. 明治期における近衛騎兵營の変遷

旧陸軍の兵營建築は、幕末以来のフランス式軍制の導入に伴い、フランスからの強い影響を受けて発達したことが知られる。なかでも、1872(明治5)年から第二次フランス軍事顧問団の一員として二度目に来日したジュールダン大尉⁴⁴(Claude Gabriel Lucien Albert Jourdan)は、1877(明治10)年頃まで在留し、「家屋兵舎建築ノ事等モ傳習」⁴⁵したことが明治期の記録に残されている。前身の兵部省より旧彦根藩邸(井伊掃部頭直弼屋敷)を拠点としていた陸軍省に加わった軍事顧問団は、旧御殿に滞在しながら⁴⁶、陸軍士官学校の創設等に関与することになる。

1871（明治4）年に政府直属の軍隊として新設された御親兵（歩兵九大隊、砲兵六隊、騎兵二小隊より編制）⁴⁷は、翌年3月（旧暦）に近衛兵に改称され、騎兵隊は近衛騎兵隊となる。その2ヶ月前にあたる1月10日（旧暦）付の軍務局文書には、「騎兵一小隊ヲ三十二騎ニ編制二小隊ヲ中隊」⁴⁸とし、馬匹80頭、兵卒84員を収容する兵営を至急新築する、とある。場所は御親兵騎兵隊の拠点であった大手前の旧長岡藩邸（牧野備前守忠雅屋敷）跡地で、史料によっては「西丸下」とも記される。現在の皇居外苑二重橋前である。

陸軍省参謀本部が1883、84（明治16、17）年に測図した『五千分一東京圖測量原圖』を参照すると、大手前にはほぼ正方形の敷地をもつ「近衛騎兵営」を確認することができる（図3-1）。やや東偏した方形の営庭を挟み、東西にそれぞれ南北方向に延びる建物の寄棟屋根が描かれている。東側の建物の真ん中には屋根下に通路があり、それぞれ中央に入口をもつ建物が二連になっていることが分かる。建設中の兵舎には1872（明治5）年1月半ば（旧暦）に兵が移駐し、工事は少なくとも翌年11月まで続いたようである⁴⁹。兵舎の構造や意匠は不明だが、老朽化のため1880（明治13）年に大規模な改修工事が行われた記録があり、おそらく木造ではなかったかと推察されている⁵⁰。近衛騎兵隊は

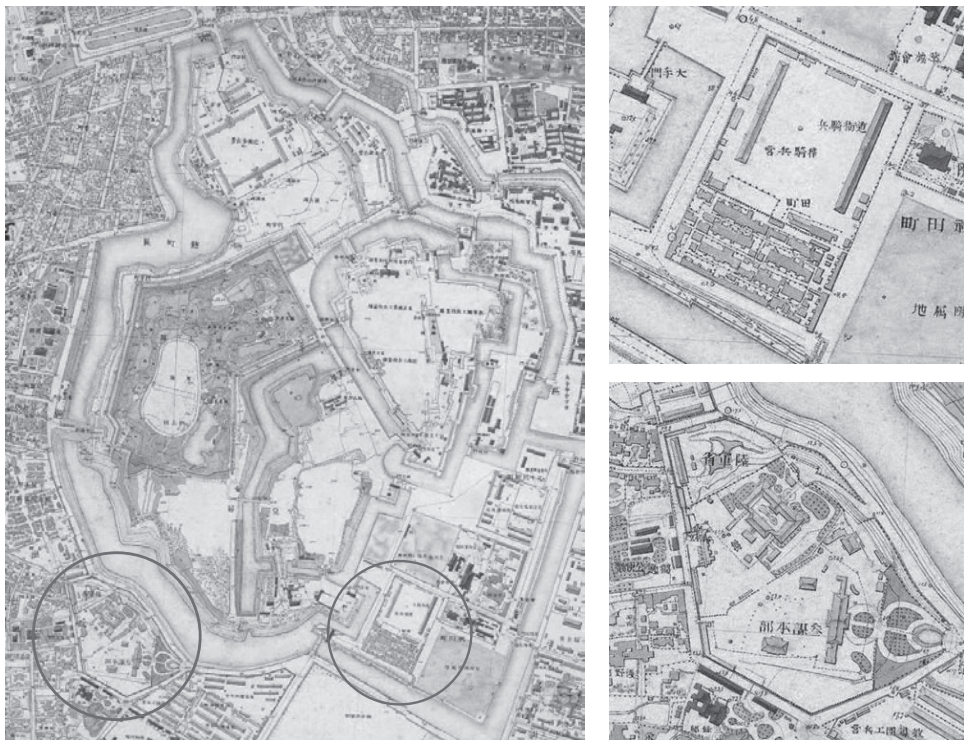


図3-1 左：明治18年の皇居周辺と陸軍省及び近衛騎兵営の位置（丸部分）
（陸軍参謀本部「五千分一東京圖測量原圖」）

右上：近衛騎兵営（地図の接合部で文字が切れている）、右下：陸軍省

1873（明治6）年に近衛騎兵大隊となり、一個中隊から二個中隊へと拡大されたため、地図上の二連の建物は二個中隊を収容した兵舎の可能性もある⁵¹。西丸下の近衛騎兵営は、皇居外苑整備に伴い1894（明治17）年に八重洲に移転するまでの間、使用された。

これより1890（明治23）年まで存在した八重洲の近衛騎兵営に関して、詳しいことは分らない。ただ、その概要は『陸軍衛生記事』の記述より窺い知ることができる。同資料は、近衛及び各師団の軍医長が提出した衛生に関する記録を陸軍省医務局が抄出・編纂したもので、作成されたのは明治23年11月だが、その例言に「主トシテ明治二十一年ノ事項ヲ記載スレトモ二十二年ニ属スルモノ亦之ヲ採録ス是レ比較参照ニ便センカ為ナリ」⁵²とあり、記された内容は明治21年または22年のものであることが了解される。

同書では、近衛騎兵大隊の兵営位置及び兵舎構造に関する、以下の記述がある。

◎騎兵大隊 兵営ハ東京府麹町区八代洲三丁目ニ占位シ東経百三十九度四十六分、北緯三十五度四十分、地勢坦夷ニシテ且ツ海面ヲ抜シコト僅ニ五米突兒ナルヲ以テ土地高燥ナラス面積三萬一千六百六十九平方米突兒ニシテ其状方形ヲ成セリ（後略）⁵³

◎騎兵大隊 兵舎ハ二棟共ニ長軸ヲ東西ニ向ケタル線状配置ニシテ営内ノ北方ニ偏在セリ其構造ハ専ラ木材ヨリ成レル二層楼ニシテ其基礎部四十仙知米突兒ハ石質ヲ用ユ床板ハ地盤ヲ距ルコト七十仙知米突兒、礎石ノ處々ニ鐵格子ヲ嵌メタル四仙知米突兒ノ方形孔ヲ穿チテ常ニ空気ノ流通ニ便ス四壁ノ内面ハ木質露出スト雖モ外部ハ盡ク漆喰ヲ以テ塗抹セリ舎ノ高サ八、二一米突兒ニシテ其廣サハ一棟ニ一中隊ヲ容ルヘシ其内部ハ楼上楼下共ニ三個ノ給養班室アリ其他楼上ニハ中隊長、小隊長、小隊副長、曹長ノ四室、楼下ニハ軍曹室及倉庫アリ⁵⁴

すなわち、八重洲兵営は海拔5mの平坦地に造営され、兵舎は敷地北側に2棟あり、いずれも東西方向に長い直線型の木造2階建てで、基礎部40cmを石積とし、床下換気のため床板を地上70cmに設置していたことが分かる。

近衛騎兵営はこの後、呉服橋内旧歩兵営に一時的に移転した後、1891（明治24）年に当時軍馬局があった旧一橋家藩邸跡地に移転する。この新兵営については、その前年7月に煉瓦造での建設が内定するも、追って近衛騎兵営と輜重兵営との「交換」が許可されたことで最終的には池尻に新築された近衛輜重兵が煉瓦造となり、一方で一橋では軍馬局の既存の建物を使用したことが、陸軍省大日記より明らかとなる⁵⁵。

1895（明治28）年東京市区改正委員会刊行『東京実測全圖』にみられる一橋の「近衛騎兵営」は、軍馬局北側に2列に並ぶ東西方向の4棟の建物（厩）と、南側に3列並ぶ南北方向の3棟の建物（中央が覆馬場、左右が箱馬場）からなり、どれが兵舎であるかは定かではない。1901（明治34）年陸地測量部刊行『一万分一地形図』では、南側は覆

馬場を残し、両側に新たな建物が複数確認できる(図3-2)。なお、これより1912(明治45)年の戸山への移転に関しては、第2章で述べた通りである。

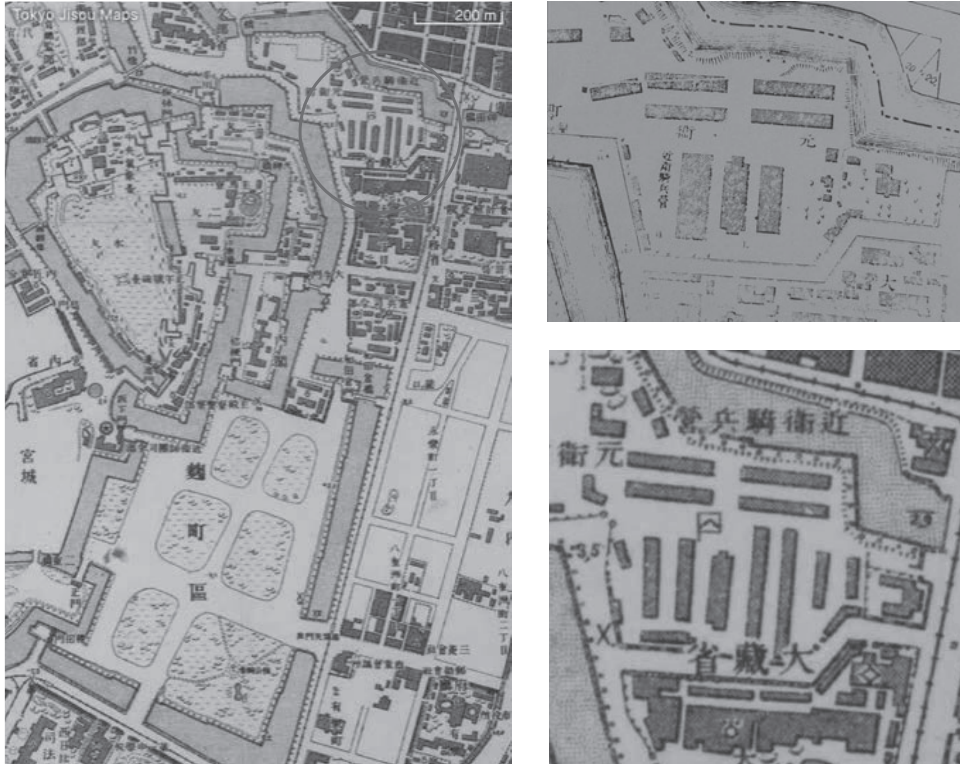


図3-2 左：明治34年の近衛騎兵營の位置(丸部分)(陸地測量部『一万分一地形図』)
右上：明治28年の様子(東京市区改正委員会刊行『東京実測全圖』)、右下：明治34年の様子

以上より、近衛騎兵營は西丸下から八重洲、さらに一橋へと移転するが、この間の兵舎はいずれも木造であった可能性が高く、戸山への移転に際して初めて煉瓦造兵舎が新築されたようである。他方、1893(明治26)年に霞が関から赤坂一ツ木(陸軍囚獄所跡)に移転した近衛歩兵第三聯隊は、煉瓦造の兵舎が2棟並ぶものであったことから、歩兵に続き、騎兵兵舎にも煉瓦が採用された最初の例が4B館であったと推察される。

3-2. 『造営法』にみる兵舎の規定

前節では近衛騎兵營の変遷を概観してきたが、本節では兵營建築に係る明治初期の建築書として、陸軍兵学寮が一部翻訳し、1870(明治3)年に出版した『造営法』(原著:C. M. van Storm van's Gravesande, *Handleiding tot de kennis der burgerlijke en militaire boukunst*(民間及び軍事建築知識便覧), 3de bruk, 1863)を参照したい。

同書には、兵營の平面計画に関して次のように記されていた。

避雷製に阿らさる屯營の全形は多分方形なり其内面に方形の中庭を置く第一図を見可し此營には歩兵三大隊を容る⁵⁶

ここに示される、歩兵三大隊を収容する「第一図」(図3-3)は、方形の中庭を囲む口の字型プランの煉瓦造3階建てで、各辺中央に入口をもち、中庭に面した片廊下を備えるものである。続いて、同じく中庭を囲む別のプランが示された後、これらとは異なる直線型プランが紹介される。

地形長くして廣からず以前説示せる兵營を建造するに適せざる時は全く兵營の形状を變する事を要するなり○兵營をして過長ならしめず全聯隊を容る可きものは屋の中央に通路を設け兩邊に兵隊の居室を作り中央の通路は其幅三エル居室の幅七、五エル其全幅内法にて十八、四エルを要す其(内(○、四エルは二個の隔壁なり))⁵⁷

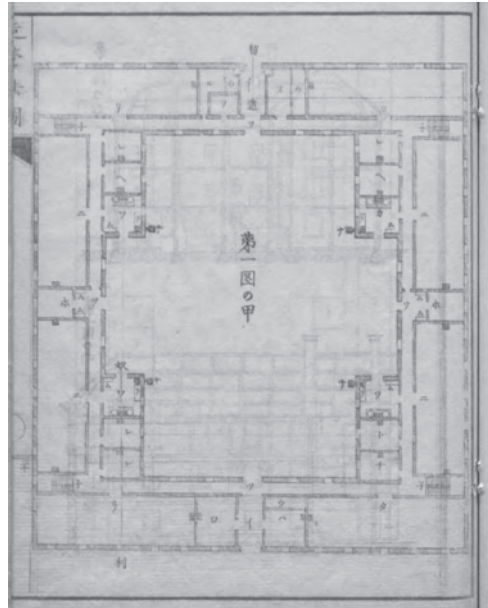


図3-3 『造営法』より第一図の甲

すなわち、前述した中庭型に適さない細長い地形である場合には、建物を直線型とし、中央を通路として両側に兵室を配して収容するというもので、いわゆる中廊下式である。ここで長さの単位として示される「エル (ell)」はelbow (肘) と同語源で、肘尺と考えられるが、現在は使われない単位であり、1エルの正確な長さは不明だが、明治期の文献をもとに約1mと解釈できる⁵⁸。

文章はさらに、中廊下の採光に関して次のように続く。

其通路は兩端と昇階の処にのミ光線の来る阿るなり是を以て暗處多かる可し其処をして明ならしめんには各処に入口を作る然る時は空しく其地を費すの患なり或は又通路の中央を下より屋上に至る迄切断し屋上に窓格を造り之より光線を下面に通るなり其兩通路ハ橋状のものを造て相交通するの処となす○此結構にして通路を適宜の幅と為んと欲せハ製作の費用甚だ多くして室内甚だ寒くして隙風を防き難し⁵⁹

つまり、中廊下にすると通路の大半が暗くなるので、入口を多く設けるか、廊下部分

を吹き抜けとし屋上に天窗を設けることが考えられるが、前者は無駄を生み、後者は費用が嵩み、かつ隙間風も入るので室内が寒くなるという。

此患防ん為めに佛の陸軍造築大尉ヘルマ氏の説に管内を三部に区分し其中央の部は通路なるとも室中の一部を為の如くし第三図の甲の如く二行の柱を以て其通路を界するなり⁶⁰

その解決策として言及されるのが、フランス陸軍造築大尉ベルマ氏 (M. le capitaine du génie Belmas) の説である。これは1848年にフランスで出版された『工兵将校報告書』に掲載された *Mémoire sur les bâtiments militaires* (軍事施設に関する覚書) にある方法で⁶¹、中廊下と室との境界を壁ではなく「二行の柱」とすることで、廊下への採光を確保するというものである。

「第三図」(図3-4) に示される断面図(甲：梁間、乙：桁行)を参照すると、2本の柱とともに腰壁、棚、銃架、軍帽を架けるフック等が備えられ、4B館の当初のしつらえを想起させる。「第二図イ」(図3-5) は歩兵三大隊を収容する直線型プランを示したもので、「カピテインベルマ氏の書中に掲たる兵営経画法の一に従て」⁶²作成されたものとある。これらを参照すると、4B館に残る中廊下と室との境界をなす2本の木製柱の由来が明らかとなる。

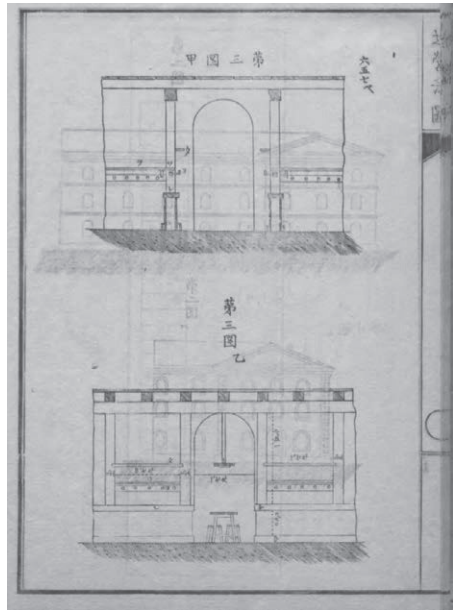


図3-4 『造営法』より第三図

以上を踏まえた上で、改めて明治期の陸軍施設の変遷を概観すると、明治初期には「第一図」のような方形中庭型の配置が多くみられ、次第に「第二図イ」のような直線中廊下型へと移行していったことが分かる。前者は広く平坦な敷地を要するため、オランダには適しているが、東京では兵営の郊外化とともに土地の制約や起伏が現実となり、フランス式の後者が主流になっていったのではないだろうか。なお、初期の兵営は方形中庭型の配置であっても、建物としては木造の直線型で、一つの建物を取り出せば片廊下式であり、従来の研究における片廊下式から中廊下式へという見方⁶³は、方形中庭型から直線中廊下型への変化とも解釈することができる。

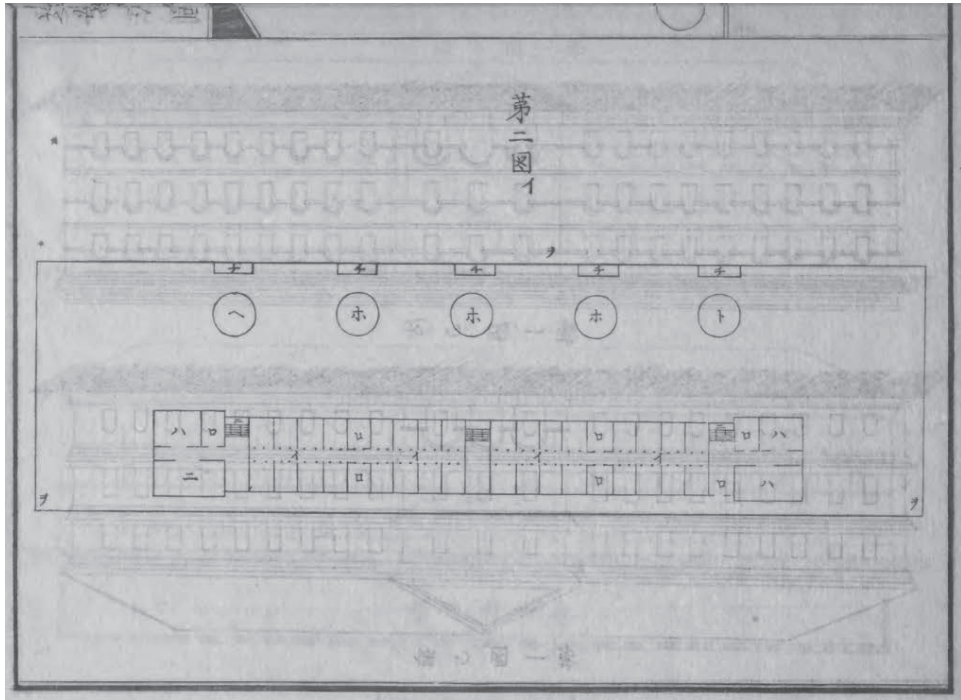


図3-5 『造営法』より第二図イ

3-3. 『建築要領草案』にみる兵舎の規定

続いて、1910（明治43）年に陸軍省によって刊行された『建築要領草案』における兵舎の規定を取りあげる。

同書は、その例言に「本書編纂ノ主旨ハ陸軍所管建築ノ為其ノ材料及構造上ノ進歩及統一ヲ計リ其ノ範例ヲ示スニ在リ」とあるように、明治期を通して全国に展開した陸軍建築の標準仕様を示したものである。衛生管理や建設費削減に加えて、標準化は設計労務の軽減にも寄与したであろう。ただし、実際の遺構は必ずしも規定通りとは限らず⁶⁴、適用は柔軟であり、むしろ標準仕様との相違点に着目することが必要であるように思われる。

『建築要領草案』に示された中隊兵舎の規定と、4B館の当初の仕様及び平面構成が類似していることは、既に報告したが⁶⁵、以下にその要点を改めて整理したい。

同書の「第二章 各建物及雑種構築物構造要領」には「第二項 中隊兵舎」として、次のようにある。

二 中隊兵舎（附表第六、七、八、九、十、十一同附圖参照）

（一）中隊兵舎 煉瓦造二階建ヲ正式トシ豫算ノ關係上其他止ムヲ得サル場合ニハ

木骨煉瓦造又ハ根積煉瓦木造ト為スヲ妨ケス床ハ階下階段ノ間ヲ除キ板張り周壁ハ塗壁トシ高六尺ノ腰羽目ヲ附シ天井ハ打上ケ板天井トス玄關及階段ノ間ハ石敷トス備考 歩兵二個中隊ヲ同一棟トス、騎兵ハ二個中隊ヲ同一棟トシ一個中隊ヲ聯隊本部ト同一棟トス、野砲兵ハ三個中隊ヲ同一棟トス、山砲兵ハ三個中隊ヲ同一棟トシ一個中隊ハ大隊本部ト同一棟トス、工兵ハ山砲兵ト同一トス、輜重兵ハ一個中隊宛トス⁶⁶

この記述に併せて、歩兵隊各建物平面図（附表第六号）、騎兵聯隊營配置（附表第七号）、騎兵隊兵舎容積表を参照することで、その概要を理解することができる。

すなわち、正式な中隊兵舎は煉瓦造2階建て、階段室の1階を除けば床は板張り、壁は塗壁で腰羽目を備え、天井は打上げ天井、玄關及び階段室は石敷とされ、これらはすべて当初の4B館に当て嵌まる。なお、ここで「根積煉瓦木造」とは基礎部を煉瓦積とした木造のことで、上述した八重洲騎兵營等がこれに該当すると考えられる。

また、その規模と平面構成に関しては、歩兵隊「三個中隊兵舎平面」（図3-6）を参照すると、一個中隊を収容するユニットが2つ連結した平面構成となっており、一つのユニットの規模は梁間8間、桁行22間で、桁行2間の玄關兼階段室を中央に備え、幅6尺5寸の中廊下の両側に諸室を配している。

これを1947（昭和22）年の4B館の最も古い実測図⁶⁷と比較すると、4B館において一つのユニットは当時の実測値で梁間7.25間、桁行22.958間、中廊下の幅は0.99間≒6尺で、部屋の配置も上の内容と類似している（図3-7）。ただし、『建築要領草案』では備考に「騎兵ハ二個中隊ヲ同一棟トシ一個中隊ヲ聯隊本部ト同一棟トス」とあったにも拘わらず、4B館では三個中隊が同一棟で、聯隊本部は別棟になっていたこと、また4B館では一つのユニットが階段室を中心として左右対称であったのに対し、『建築要領草案』では非対称であるという違いもあることは、既に報告した通りである。

3-4. 4B館の近衛騎兵營史における位置付け

これまで見てきたように、近衛騎兵營は1912（明治45）年に一橋から戸山に移転した際に、初めて兵舎を煉瓦造で建設した可能性が高く、また、その構造や規模、仕様、平面構成は、移転の2年前に陸軍省が刊行した『建築要領草案』の規定とほぼ一致していることが明らかとなった。

兵舎建築の明治期における変遷を概観するにあたって、注目したいもう一つの視点は、明治20年代頃から次第に増加する建築の衛生への言及である。上述した『陸軍衛生記事』（明治26年）に限らず、例えば明治29年に「兵備の擴張に伴ふて急務なるは兵舎の改良」⁶⁸とし、兵營建築地の選定、衛生建築構造の改良等を陸軍が実施することが報じられていることや、兵舎内の採光・通気不良によって病人が多く、窓増設の改修願が出されてい

ること⁶⁹等、衛生環境改善のためにも標準化が必要であったことを窺わせる。

4B館は、土地の制約や起伏のため東西に長い直線型のプランとし、煉瓦造の兵舎として採光、通気を確保するために、上述したベルマ氏のモデルに従い中廊下と両側の室との境界を2本の柱とし、衛生環境にも配慮がなされている。三個中隊を収容できるよう、標準仕様を離れて3つのユニットを連ねたことは、日清戦争後の軍備増設に伴い、1896(明治29)年に近衛騎兵聯隊がそれまで二個中隊だった編制を三個中隊に拡大したから、と推察できる。

ただし、第一次世界大戦後の1921(大正10)年には、軍縮の影響から再び二個中隊に戻しており、騎兵はその後も縮小されていくことになる。こうした歴史に鑑みれば、学習院戸山キャンパス内の校舎として生まれ変わり、使い続けられた4B館は、日本において騎兵隊が全盛期だった時代の証左として、大変貴重な遺構であると言えるだろう。

3-5. 小結

以上、第三章では、明治期における近衛騎兵營の変遷の中での4B館の位置づけを確認してきた(図3-8)。東西に長い直線型・中廊下式のプランは、幕末にオランダ経由で伝わった19世紀フランスの兵舎モデルを踏襲したもので、それが日本において衛生環境の改善を目指し改良を重ねた、明治末期の標準仕様に則っていること、ただし、軍備増設のため三個中隊を収容できるよう拡張を施した結果であると解釈でき、時代の趨勢を反映した、その歴史的価値の一端が垣間見られた。

4. おわりに

以上、女子短大時代から現在までの戸山キャンパス女子大地区の変遷に焦点を当て、2009～11(平成21～23)年と2019～21(令和元～3)年に行われた調査の成果として、4B館とC館に遺る近衛騎兵營時代痕跡や建設年の特定、さらに、近衛騎兵營の変遷から見た4B館の位置付けを明確にすることができた。

鹿狩りや花見の宴で賑わった屋敷が、兵營施設、そして教育施設へと移り変わった戸山キャンパス。その中で、女子大地区は1946(昭和21)年の女子学習院の移転以降、整備と開発を繰り返した。関東大震災と太平洋戦争という大災害、さらに以上の変遷を経てなお、大正初期に完成した兵營地の痕跡が残存し、かつ現在までキャンパス全体の意匠と建物の配置を決定づけていることの重みはきわめて大きい。

女子大学の収蔵資料の中で最大規模の資料と言ってもよい4B館の特徴は、以下の二点に集約することができる。

学習院戸山キャンパスに遺る4B館とC館に関する建築史的研究

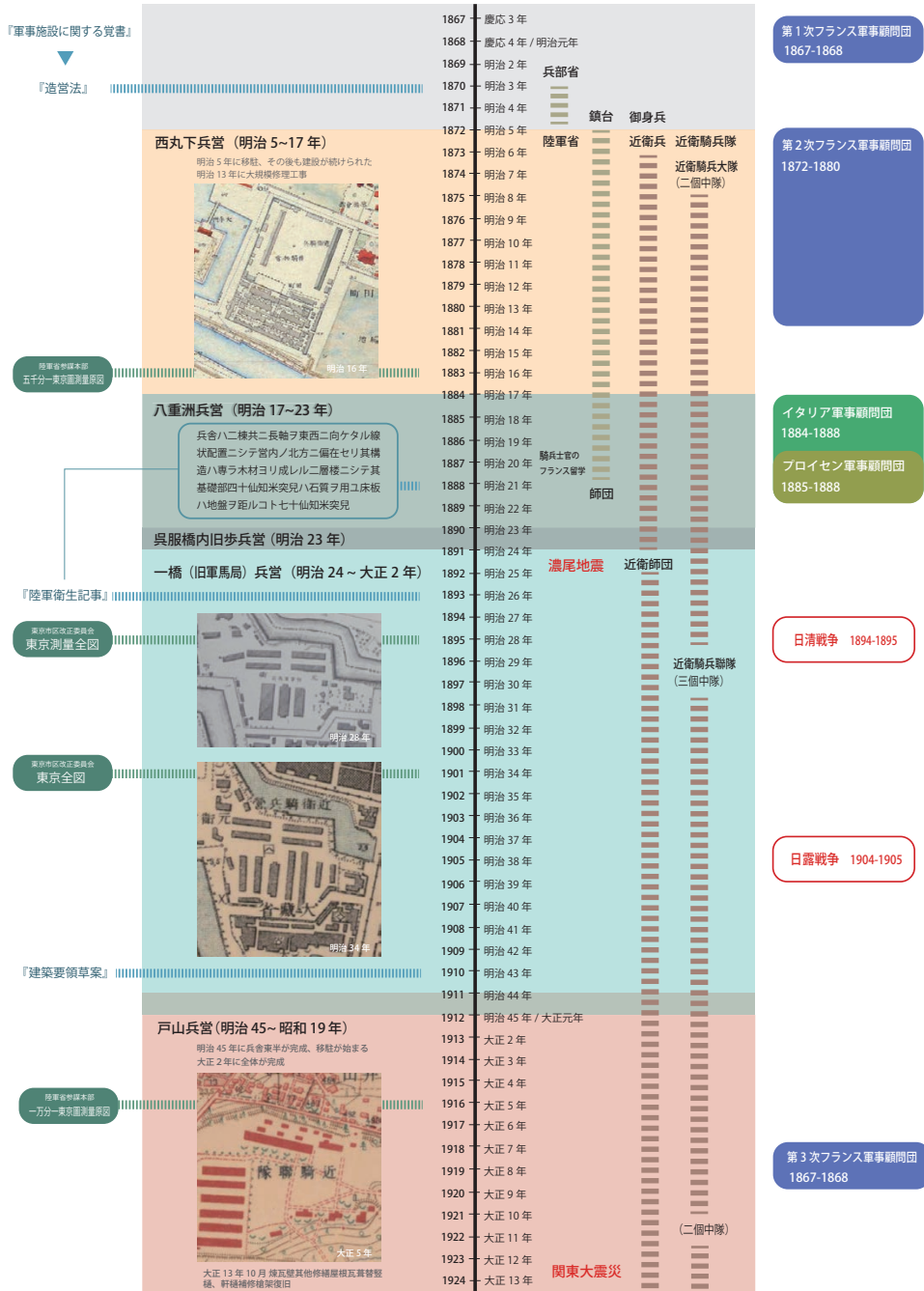


図3-8 近衛騎兵営関連年表

4-1. 構造的特徴の希少性

一連の調査で、4B館の鉄筋コンクリート部分が関東大震災後に修繕された可能性が高いことが明らかになった。全国的に見ても、煉瓦造と鉄筋コンクリート造が併用されている数少ない現存建物の一つであり、構造細部までが残っている点で、さらに貴重である。例えば、広島県が保存活用を決断した旧広島陸軍被服支廠は4B館と同じ1913年竣工の兵営建築である⁷⁰。しかし、この建物は設計の段階で煉瓦造と鉄筋コンクリート構造が併用されており、4B館は鉄筋コンクリートを耐震補強目的で使用していた点でまた違う作例と言える。そのため、日本における近代建築技術の発展過程を見て取ることができる作品とすることができる。

4-2. 特殊部隊兵舎の日常を物語る希少な再利用例

残存する同時期の煉瓦造の兵営建築、特に兵舎は全国で見ても少ない。4B館は、管見の限り、残存する陸軍の中で特殊部隊だった近衛師団の3つの建物の内の一つである⁷¹。多くの兵舎が戦後に学校施設へコンバージョンされたが⁷²、殆どの場合、時間がたつにつれ建て替えられたのに対し、4B館は減改築を繰り返しながらも、継続的に利用された点が全国的にも希少である。加えて、痕跡が残りにくい一般兵士の日常を垣間見ることのできる資料でもある。実際、展示施設や教育施設に転用された旧司令部庁舎や、将校のために建てられた偕行社は、旭川、弘前、金沢、東京、豊橋、京都、岡山、善通寺などで見学することができる。しかし、これらは陸軍の中で象徴的な役割を担う建物であり、当初の兵営建築の一部に過ぎない。それらとは異なり、4B館は最も痕跡が残りにくい下士官の日常を伝える貴重な資料である。実際に利用したストーブの跡、物干しと思われる板やワイヤー、靴などを掛ける釘、出入口の敷居に刻まれた長靴で歩いた跡といった、他では見られない日常生活の痕跡がそのまま残っている。加えて、教育施設になってからの利用の痕跡も見ることができる。

以上の理由で、戸山キャンパス、そして特に4B館は、近代日本の歴史資料としても、建築史、建設技術史、都市開発史、戦災復興史、教育史においても重要な例である。

近年、世界の兵営建築の研究と利用活用はますます盛んになっている。世界の文化財の研究、利活用、さらに都市開発、観光開発や持続可能な開発の専門家からなる国際非政府組織イコモスも兵営建築に着目しており、日本の研究者も協力している城塞軍事遺産国際学術委員会を立ち上げた⁷³。こうした国際的な動向に応じ、4B館を建て替えずに耐震補強工事に取り組んだ学習院は、痕跡の全てを保存することはかなわなかったものの持続可能な開発目標と最新の学術研究に沿う選択をしたことになる。建物に備わる建築的特徴をさらに深められる機会が今後もいただけるのであれば、ぜひご協力をいただ

きたい。あわせて、学習院が目白キャンパスで実践されている同じ方針で⁷⁴、戸山キャンパスでも4B館を貴重な文化財として継続的に利活用し、その価値が多くの方々に共有されてゆくことを期待したい。

謝辞 本稿の執筆にあたって、文化財保存計画協会の岡建司氏に多くの情報と助言を頂いた。記してお礼を申し上げる。

注及び主な参考文献

- ¹ 本稿は四部構成であり、執筆は「1. はじめに」と「4. おわりに」がウーゴ、「2. 4B館及びC館に遺る近衛騎兵聯隊施設の痕跡」が杉山、「3. 近衛騎兵營の変遷からみた4B館」が佐藤による。
- ² 例えば、徳川美術館（編）『江戸のワンダーランド 大名庭園』、展覧会図録、2004年11月13日～12月19日。初田亨「学習院女子中等科・女子高等科」、日本建築学会（編）『総覧 日本の建築』、第3巻「東京」、1987年、164～165頁。学習院百年史編纂委員会（編）『学習院百年史』、第二編、1980年。学習院女子短期大学史編纂委員会（編）『半世紀 学習院女子短期大学史一図録一』2000年、『半世紀 学習院女子短期大学史一通史・資料編一』、第一法規出版、2003年。学習院女子中等科 女子高等科（編）『学習院女子中等科 女子高等科125年史』2010年。学習院アーカイブズ（編）『ニューズレター』、第3号2014年2月、第9号2017年2月、第15号2020年2月、など。
- ³ 杉山経子『学習院女子大学4号館・女子部B館及び女子部C館についての現状調査、背景調査報告』2010～11年、文化財保存計画協会（編）『学習院女子大学4号館・女子部B館 記録調査報告書』2020年、『学習院女子大学4B館 追加調査報告書』2021年。2020年の報告書は、次の冊子にまとめられた。工藤雄一郎（編集長）『赤レンガ校舎の軌跡—学習院 戸山キャンパス4B館』、学習院女子大学 学芸員課程委員会・収蔵資料管理運営委員会、2021年。
- ⁴ 移転の詳細と建物の配置については、第二章と第三を参照されたい。
- ⁵ 松尾美恵子「序章」、学習院女子短期大学史編纂委員会（編）『半世紀 学習院女子短期大学史一通史・資料編一』、前掲、17頁。
- ⁶ 学習院女子大学（編）『学習院戸山キャンパスの記憶—近衛騎兵連隊時代—』2010年、近衛写真集編纂委員会（編）『近衛騎兵聯隊写真集』1991年。
- ⁷ 学習院百年史編纂委員会（編）『戸山移転』『学習院百年史』、前掲、第四章第三節第二項、568～574頁、など。
- ⁸ 今村洋一「戦後日本における旧軍用地の学校への転用と文京市街地の形成について—陸軍師団司令部の置かれた地方13都市を事例として—」、日本都市計画学会（編）『都市計画論文集』、49巻、1号、2014年4月、41～46頁。
- ⁹ おおよそ近衛騎兵聯隊時代の厩舎、軍馬補充部、獣医室のあった敷地の南西部分は、1949（昭和24）年より東京都立戸山高等学校（旧東京都立第四新制高等学校）の校地となった。北東部分の学生農耕地は新宿区立西早稲田中学校（旧戸塚第一中学校）となった。
- ¹⁰ 「戸山移転」『学習院百年史』、第二編、前掲、570頁。桑尾光太郎「戸山の男子中等科—生徒の声より—」学習院アーカイブズ（編）『ニューズレター』第15号、2020年2月、6～7頁。
- ¹¹ 乾尚彦「第3章」『半世紀』、前掲、2003年、79頁。
- ¹² 初期段階では、図書館の設計はコンペを前提に、鹿島建設設計部がまず検討のための図面を作成した。その後、コンペの実施はなくなり、図書館設計は菊竹清訓（1928～2011）に任せられた。しかし、最終的に前川國男（1905～1986）に依頼することとなった。図書館は1985年に第一回日本図書館協会建築賞を受賞している。日本図書館協会施設委員会図書館建築図集編集委員会（編）『日本図書館協会建築賞作品集1985～2006—図書館空間の創造—』、日本図書館協会、2007年。乾尚彦「第3章」『半世紀』、前掲、2003年、88～91、116～120頁。坂倉準三（1901～1969）や前川國男が関わった学習院目白キャンパスと同様に、戸山キャンパスでも20世紀を代表する日本人建築家が関わっていることが分かる。
- ¹³ 「打ち込みタイル」については、星野茂樹「学習院に生きる前川國男の建築」『学習院アーカイブズニューズレター』、13号、2019年2月20日、6頁。

- ¹⁴ 2003(平成15)年より実施されたキャンパス計画で、桜木が10本(のちに樹齢約百年と判明)伐採されることが決定した。その決断を受け、女子大学の前学部長の工藤幹巳教授(故人)と今橋理子助教(当時)は、「桜再生プロジェクト」を立ち上げ、伐採された桜木で2つの企画を短期大学・女子大学卒業生同窓会組織「草上会」の協力で実現した。一つは、伝統的な技術を使って浮世絵版画の版木を作ること、もう一つは学生用の机の作成であり、伐採された桜木はこのように桜材となってキャンパスに遺ることとなった。詳細は、今橋理子「環境保護から創造する伝統芸術(1)桜伐採という衝撃」『UP』東京大学出版会、2006年6月、24～29頁、「環境保護から創造する伝統芸術(2)桜再生プロジェクトの試み」『同』2006年7月、27～33頁、「環境保護から創造する伝統芸術(3)ソメイヨシノを千年生かす」『同』2006年8月、28～23頁。
- ¹⁵ 乾尚彦「第3章」『半世紀』、前掲、2003年、77～91、116～126頁。
- ¹⁶ 鹿島建設『学習院戸山キャンパス4号館建物調査 耐震診断』、2007年～。
- ¹⁷ 本研究は、学校法人学習院企画課の依頼により杉山が(2009～11)、学習院女子大学の依頼により株式会社文化財保存計画協会が(2019～21)実施した調査結果に基づくものである。また杉山経子・佐藤桂・ウーゴミズコ「学習院戸山キャンパス4B館及びC館に遺る近衛騎兵聯隊施設の痕跡 学習院戸山キャンパスの歴史的建造物に関する研究(1)」日本建築学会大会学術講演梗概集、2021.9に新たな知見を加え、加筆修正したものである。
- ¹⁸ 「近衛騎兵連隊の略史」新潟県近衛会顧問 飯田貞国編 靖国偕行文庫、「近衛騎兵連隊歴史資料」八木藤吉編 靖国偕行文庫
- ¹⁹ 前掲書18「近衛騎兵連隊歴史資料」八木藤吉編 靖国偕行文庫
- ²⁰ 「陸軍省大日記乙編 M44-5-13」防衛省防衛研究所
- ²¹ 別紙図面は添付されていない。
- ²² 『近衛師団沿革概要』近衛師団司令部 1910年 靖国偕行文庫
- ²³ 前掲書19
- ²⁴ 近衛師団経理部『建造物履歴表 昭和11年3月31日調』1936年 国立公文書館
- ²⁵ 『槍乃誉 近衛騎兵聯隊除隊記念 大正九年十一月 近衛騎兵聯隊編』1920年 防衛省防衛研究所
- ²⁶ 「陸軍省大日記乙編 S4-3-26」昭和4(1929)年6月6日付達案「近衛騎兵聯隊兵舎其他震災復旧工事実施の件」防衛省防衛研究所
- ²⁷ 前掲書24の履歴には、「明治四十五年三月新築、大正元年十一月暖炉煙突繋鉄口物取付、大正二年三月半部移築合併、大正十三年十月煉瓦壁其他修繕屋根瓦葺替樞樞軒樞補修槍架復旧」と記述されており、関東大震災の翌年1924(大正13)年10月には、煉瓦壁の修繕、屋根瓦の葺き替え、樞の補修(堅樞、軒樞)、槍架の復旧がなされたことがわかる。一方で『旧近衛師団司令部庁舎保存整備工事報告書』1978年文化庁には「旧近衛師団司令部庁舎は、明治四十三年に建築され、その後関東大震災の時壁体にかかりの被害を受けたため、煉瓦壁体の頂部に鉄筋コンクリートの臥梁を廻し、また東翼壁体の二階床位置において鉄帯で補強されていた。」と記述されており、4B館同様の臥梁が設けられていたこと、東翼の壁体の2階床位置に鉄帯で補強されていたことが判明している。
- ²⁸ 初田亨、鈴木誠「東京砲兵工廠銃包製造所の煉瓦造建造物にみる明治後期から昭和初期の構造変化」『日本建築学会計画系論文集』第489号、223-230、1996年11月他
- ²⁹ 『近衛騎兵連隊写真集』1991年 近衛騎兵連隊写真集編纂委員会
- ³⁰ 陸軍省『建築要領草案』1910年 東京都公文書館
- ³¹ 前掲書29
- ³² 前掲書30
- ³³ 「銀線」は、当時のGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)が国内のガラスメーカーに燃料の特別配給を施し、学校補修専用ガラスとして生産させたものである。ガラスの表面に銀色の筋が見えることが、「銀線」と呼ばれるようになった由縁である。『社史 旭硝子株式会社』1967年 旭硝子株式会社
- ³⁴ シャッターのハンドルボックスの内部には、歯車の組み合わせで小型の巻揚げ機が収納されている。
- ³⁵ この自動降下式のスチールシャッターでは、サムピースを操作することにより、歯車の留め金が発して自重を利用してシャッターが自動的に降下(閉鎖)する仕組みとなっている。それに対してシャッターを開放させる時は、専用の巻揚レバーハンドルを使って人力で操作を行なう。建築金物商會『建築土木資料総覧』1928年
- ³⁶ 前掲書29
- ³⁷ 前掲書25
- ³⁸ 屋根を支えるために棟から軒先に渡す長い材。

- ³⁹ 『大正六年十月二十五日 御臨幸記念写真帖 近衛騎兵聯隊』1917年個人蔵
- ⁴⁰ 『学習院女子中等科、女子高等科125年史』学習院女子中等科女子高等科編 2010年
- ⁴¹ 改修工事は、(株)三菱地所設計の設計、鹿島建設(株)の施工で行なわれた。
- ⁴² 新設された庇の腕木は杉材、庇は当初の素材が不明であるため銅版葺きとされた。なお新設された北側の正面玄関には元来庇はなかったが、外観の意匠を統一するため同じ意匠の庇を設置している。
- ⁴³ 痕跡調査の結果この引き戸は、当初からの引き戸の足元に合板を足し20cmほど高くしていたことが確認された。炊事場の写真から、引き戸が開いた出入口には階段が設けられていたことがわかる。炊事場の奥にある部屋の床は炊事場(旧工芸教室)より20cmほど上がっていたため、のちに短かった引き戸に袴をはかせたことが推察される。そのため復元した引き戸は、当初のまま短い扉の意匠とし、20cmの下駄をはかせ、当初の扉を踏襲するものとした。
- ⁴⁴ 慶応2年来日したシャルル・シャノワース大尉を団長とする第一次フランス軍事顧問団(総勢19名)は、鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍の敗北後に廃止され、帰国したが、明治新政府が明治5年に招請した第二次軍事顧問団(総勢27名)の中には、第一次軍事顧問団のメンバーも数名含まれており、ジュールダン大尉もその1人であった。
- ⁴⁵ 陸軍工兵学校『工兵遠隔大要』(明治年間、発行年不詳)に「ジュールダン氏ハ〔明治〕十年頃マテ在留セリ家屋兵舎建築ノ事モ傳習セリ」(〔〕内は筆者付記)とある。Cf. 中森勉「明治初期における陸軍兵舎建築について」日本建築学会大会学術講演梗概集, 1993.9.
- ⁴⁶ 前島美知子「日仏技術交流史からみた陸軍の施設計画に関する研究」慶應義塾大学博士学位請求論文、2012, 第7章「1-2 御親兵と騎兵」。
- ⁴⁷ 薩摩藩の歩兵四大隊・砲兵四隊、土佐藩の歩兵二大隊・砲兵二隊・騎兵二小隊、長州藩の歩兵三大隊から編制され、騎兵隊は土佐藩出身であった。
- ⁴⁸ 公文別録・陸軍省衆規鑑鑑抜粹・明治元年～明治八年・第十一巻・明治四年～明治八年JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.A03023167800、明治四年「大手前へ騎兵営ヲ新築ス」国立公文書館所蔵。Cf. 前島, *op.cit.*
- ⁴⁹ 陸軍省第日記、明治5年「大日記壬申正月省中之部辛」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C04025165300、明治5年「築造官騎兵営新築の伺軍務局見込申出」防衛省防衛研究所所蔵。Cf. 前島, *op.cit.*, 第7章「1-3-2 近衛騎兵営の規模と様式」。
- ⁵⁰ 前島, *op.cit.*
- ⁵¹ 陸軍兵学寮が明治5年に刊行した『歩兵内務書第一版上』に「一棟二半大隊」とあり、半大隊とはすなわち二個中隊のことで、歩兵に関する規定ではあるが、兵舎1棟あたり二個中隊が標準となっていたことが窺われるためである。Cf. 中森, 1993.
- ⁵² 前原等『陸軍衛生記事』陸軍軍医学会雑誌第三十八号附録, 明治26年。
- ⁵³ 前掲書, p. 2.
- ⁵⁴ 前掲書, p. 40.
- ⁵⁵ 陸軍省大日記、明治25年、「參大日記 5月」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C07041223400「近衛騎兵輜重兵彼是交換ノ件」防衛省防衛研究所所蔵。Cf. 前島, *op.cit.*, 第7章「4-1-1 近衛騎兵営の移転」。
- ⁵⁶ 陸軍兵学寮『兵法十ノ三 造営法 全』, 明治3年, p. 15. なお、『造営法』については村松貞次郎「建築学史」『新訂建築学体系37』彰国社, 1976, pp. 86-87に言及されている。
- ⁵⁷ 『造営法』p. 21.
- ⁵⁸ 明治期に刊行された西村茂樹『泰西尺度量衡等雜記』(国立国会図書館所蔵、発行年不詳)によれば、「涅特兒蘭土〔ネーデルラント〕一エルノ尺度ハ大地球子午線ノ径四千分一ヲ取ル」(〔〕内は筆者付記)もので、これより算出すれば、子午線の長さは約4万9kmであるため、この4千分の一で約1.00225mである。『造営法』に言及し分析した鈴木治平他「旧歩兵第四連隊兵舎の復元資料について その2 平面」日本建築学会東北支部研究発表会, 1981.2, pp. 249-252では、1エルを1mとして計算している。
- ⁵⁹ 『造営法』pp. 22-23.
- ⁶⁰ 前掲書, p. 23.
- ⁶¹ Cf. 前島美知子「旧陸軍遺産の成立に関する研究－旧陸軍黎明期の建築計画とフランス陸軍の影響－」日本建築学会大会学術講演梗概集, 2010.9; 2011.8; 「日仏技術交流からみた陸軍の施設計画に関する研究」2012.9; 「日仏技術交流史からみた陸軍の施設計画に関する研究－旧歩兵第十六聯隊兵舎(新発田)の事例とフランスからの系譜」2014.9.
- ⁶² 『造営法』p. 25.

⁶³ 中森, 1993. なお、明治期を通して歩兵連隊兵舎の配置を分析した既往研究として、加藤宏、飯淵康一、永井康雄「歩兵聯隊営における兵舎配置の形式とその変遷」日本建築学会東北支部研究報告会, 平成19年6月, pp.169-172がある。

⁶⁴ 中森氏による既往研究では、師団司令部の遺構及び図面等との比較から、これは「明治40年代に造られた実例の建築群を、一冊にまとめたものであると考えられ」としているが、ともに煉瓦造である第十六師団司令部庁舎(明治41年8月)と近衛司令部庁舎(明治42年)の平面は『建築要領草案』と同じではなく、疑問が残る。Cf. 中森勉「明治中期以降における兵舎建築について」日本建築学会大会学術講演梗概集, 1995.8; 「明治後期における陸軍省『建築要領草案』にみる標準化について」日本建築学会北陸支部研究報告集, 1995.8.

⁶⁵ 佐藤桂、ウーゴミズコ、杉山経子「学習院戸山キャンパス4B館(旧近衛騎兵聯隊兵舎)の仕様及び平面構成について 学習院戸山キャンパスの歴史的建造物に関する研究(2)」日本建築学会大会学術講演梗概集, 2021.9.

⁶⁶ 陸軍省『建築要領草案』p. 52.

⁶⁷ 昭和22年4月5日付「(財団法人学習院)財団法人設立許可の件」(国立公文書館所蔵、請求番号:平5文部01431100)に添付された許可申請図面。

⁶⁸ 「陸軍兵營建築法の改良(時事新報)」「雑報」『建築雑誌』明治29年3月, p.79.

⁶⁹ Cf. 中森, 1995.

⁷⁰ アーキワークス広島(編)『旧広島陸軍被服支廠倉庫 特設サイト』<http://www.oa-hiroshima.org/hifuku/hifuku.html> 落合宏美「被服支廠 実質「保存」へ転換 県23年度着工」『読売新聞オンライン』、2021年7月26, 5時。 <https://www.yomiuri.co.jp/local/hiroshima/news/20210726-OYTNT50046/> 【最終閲覧日2021年11月9日】

⁷¹ 国内の他の兵營建築の活用については、杉山経子・佐藤桂・ウーゴミズコ「類似建築との比較から見る戸山キャンパス4B館の建築的特性について 学習院戸山キャンパスの歴史的建造物に関する研究(3)」『学術講演梗概集』、2021年度大会(東海)、建築史・意匠、日本建築学会、695～696頁を参照。

⁷² 今村洋一「旧軍施設の学校への転用方針」『旧軍用地と戦後復興』、中央公論美術出版、2017年、72～73頁。戸山地域については、214～223頁を参照されたい。

⁷³ ICOMOSは、国際記念物遺跡会議(International Council on Monuments and Sites)のことで、1965年に設立された文化遺産保護を目的とした国際的な非政府組織(NGO)である。文化遺産の保護に関わる任務のうち、世界遺産登録時の世界遺産委員会への諮問を行うことも含まれる。本部はパリ郊外のCharenton-le-Pont(仏)にあるが、世界各国に国内委員会が立ち上げられており、日本でも日本ICOMOS国内委員会が1979年より活動しており、2018年より一般社団法人となった。また、特定の文化遺産の保護に関する研究や活動を図るため、ICOMOSは複数の学術委員会も立ち上げている。その中で、城塞軍事遺産国際学術委員会Icofortは2005年に正式に発足した。(<https://icomosjapan.org/>、 <http://icofort.icomos.org/home>、 <https://www.icofort.org/>) 【最終閲覧2021年11月26日】

⁷⁴ 目白キャンパスでは2009(平成21)年より次の建築物それぞれに「国土の歴史的景観に寄与しているもの」や「造形の規範となっているもの」が認められ、登録文化財として保護されている。文部省技師久留正道設計による正門、厩舎、乃木館(旧総寮部)1908(明治41)年、北別館(旧図書館)1909(明治42)年、宮内省内匠寮設計による東別館(旧皇族寮)1913(大正2)年、南一号館(旧理科特別教場)1927(昭和2)年、西一号館(旧中等科教場)1930(昭和5)年。文化庁(編)「登録文化財(建造物)」『国指定文化財等データベース』1997～2020年【2021年11月26日】。杉山経子・佐藤裕久「明治期における学習院目白キャンパスの空間構成に関する復元的研究」『日本建築学会計画系論文集』第76巻 第668号、2011年10月、1971～1979頁などを参照。

地図出典：

明治18年 陸軍参謀本部『五千分一東京圖測量原圖』(日本地図センター「東京時層地図」より)

明治28年 東京市区改正委員会『東京実測全圖』

明治39年 陸地測量部『一万分一地形図』(日本地図センター「東京時層地図」より)

大正5年 陸地測量部『一万分一地形図』(日本地図センター「東京時層地図」より)

(本学准教授, 杉山経子建築+デザイン研究室主宰 博士(工学), 文化財保存計画協会、特任研究員、博士(建築学))